

2022 年 6 月 22 日(水)

もう一つのスタンディングオベーション

芸術鑑賞教室で観た娯楽性の高い『アナと雪の女王』とはひと味違って、週末には社会性の高い作品『パンドラの鐘』の観劇に出かけて来ました。

作品は、日本を代表する演出家である蜷川 幸雄(1935-2016)さんが、今回の会場であるシアターコクーンで芸術監督に就任した1999年、その記念にと野田 秀樹(1955-)さんに依頼して作った新作の戯曲です。演劇界を代表する二大巨頭が関わった作品だけに壮大なスケールで斬新な内容で、今年で七回忌を迎える蜷川さんへの記念碑的な("NINAGAWA MEMORIAL")作品として位置づけられています。今回のシアターコクーンでの公演は、新進気鋭演出家と呼び名の高い杉原 邦生さん(1982-)が担当しています。

さて、舞台は野田さんの出身地である長崎で、時代は太平洋戦争開戦前夜。ピンクカートン財団による古代遺跡の発掘現場で繰り広げられる物語です。考古学者カナクギ教授が掘り出した1本の釘から、古代王国の世界へと飛躍します。そこではヒメ女が王国の乗っ取ろうと、さまざまな策略を企て、兄を「狂気の王」として幽閉してしまいます。そこに異国から掘り出された巨大な鐘が運びこまれるのですが、実はこれが「ある形」に似ているのです。その形に違和感を抱いたとしたら、あなたの鑑賞眼は本物と言えるでしょう。それが「パンドラの鐘」。

ストーリーが進むに連れて、ご多分に漏れず登場する言葉遊びに充ちた人物名の由来が次々に種明かしがされながら、物語は一気に現代の世界情勢にも当てはまるシリアスな話題へと展開して行きます。ここまで来て、やや退屈だった前半の導入部との関連に気付き、ストーリーの全容が判明した次第です。

そしてフィナーレは物語や神話の定石通りに、冒頭のシーンへと回帰します。発掘現場を示す採掘穴と4本の柱そして大きな鐘以外に、ほとんど仕掛けのない舞台の後方、大道具搬入口が突然開いて、遙か遠くの外の一般道路を行き交う人や車さえもが舞台背景に取り込まれるという演出…。外を歩く人は舞台に気づき小さな驚きを感じながらも、平静さを装いながら通り過ぎる表情さえが舞台の一部になっています。

幕が閉じると定番のご挨拶ですが、40m四方？もある広い舞台を左右から交互に20名の出演者が走って中央まで進んで来ます。それを眺めつつ客席では、『アナと雪』の場合と違って、じわじわと拍手が広がり、やがて全員が総立ちになってのスタンディングオベーションへととなりました。ストーリーの重厚さが、それを象徴しているかのようでした。

出演は成田 凌さんと葵 わかなさんのダブルキャスト、それを中堅の前田 敦子さん、玉置 玲央さん、大鶴 佐助さんなど。さらに南 果歩さん、白石 加代子さんなどのベテランが脇を固める編成になっています。ポスターデザインは、蜷川さんのお嬢さんである実花さんの手によるヴィジュアルで豪華な作品となっています。因みに、『パンドラの鐘』は6月28日(火)までBunkamuraシアターコクーンで公演中。

ウクライナ戦争の最中、折しも核兵器禁止条約の第 1 回締約国会議が今月 21 ～ 23 日までウィーンで開催されており、広島と長崎の両市長が国際 NGO・平和首長会議を代表して「共感の連鎖」を訴えました。また、校内では 6 月 18 日に「社会的問題に対する中高生の意識調査」を行ったところですが、その結果分析は第 2 回聖塾(7 月 23 日)などを通じてお伝えします。

コロナ禍も少しは落ち着きを見せ始め、規制も少しずつ緩やかになりつつあります。私も毎週末には、シネマコンプレックスやミニシアターでも映画鑑賞を再開しました。いました。十分な予防対策をしつつ、多くの感動の時間を過ごしたいものです。

校長 石飛 一吉